

平成25年度 第1回 河内長野市文化振興計画推進委員会 議事録

【日時】平成25年5月30日（木）午後7時30分～午後9時30分

【場所】市役所7階 701会議室

【出席者】

〈河内長野市文化振興計画推進委員会委員〉

谷 悟・魚返 普子・川上 勝・小西 朋子・白井 春夫・寶楽 陸寛・
松村 千恵子・南 美鈴・山田 淳子・渡辺 正直

〈事務局（河内長野市教育委員会事務局ふるさと文化課）〉

井上・東畑・西野

〈オブザーバー（公益財団法人河内長野市文化振興財団）〉

萬木

【配布資料】

- ・平成25年度 第1回 河内長野市文化振興計画推進委員会次第
- ・資料1 平成24年度第5回河内長野市文化振興計画推進委員会議事録
- ・ラブリートニュース他

以上

谷委員長

本日は、このメンバーで審議する最後の委員会となります。間もなく、委員任期切れの時期となりますが、今一度、皆さんにこれまでの経緯を振り返って頂き、本委員会の総括をしたいと思う。私は、委員長を二期務めさせていただきましたが、最後は、全委員の総意として、これからの河内長野、我がまちの文化を少しでも推進できるような提言書をまとめたいと考えます。前回の委員会から少し、時間が経っていますので、まずは、私からお話をさせていただきたいと思う。テーマは、データベースの作成とその活用法であったが、特に後者に焦点をしばって話をさせていただいたことを記憶している。如何なる活かし方があるのか、2つの提案をさせていただいた。

一つは、芸術文化の創作現場や拠点を巡るツアーが実施できるプラン。データベースさえ完成させれば、どのような人達が如何なるジャンル、規模で活動しているのかということはある程度把握できるので、そのようなツアーも実現することが出来ると考える。そこに行くとは結果だけでなく、制作のプロセスも見ることができ、ワークショップなども含めた実体験ができるため、交流が生まれるものと思われる。サテライト感覚をキーワードに、我がまちにあるクリエイティブな現場に市民が出かけ、漂流教室としていくつかの場所を巡回する仕掛けをつくれれば点は線になり、やがて、面へと繋がっていくものと思われる。これは膨大な予算を計上して、箱物を建設するわけではないので、我がまちの資源を浮上させ、コーディネートするだけで、十分におこなうことができるものであろう。また、魚返委員からも話があったように、色々なグループや個人が制作の拠り所としている、我がまちにある社寺をはじめとした文化資源やそれらと関係がある市外のような場をバスで訪ね、楽しむことも更なる広がりとして考えられるのではなかろうか。そして、ただ、回るだけでなく、簡単なレビュー等を記述し、データベースに付随するサイトに文章や写真を発表することも出来る。

もう一つは、ラプリーホールなどで行っているミュージックパークネットの活用を考えたい。文化に誇りを持った市民が多数、住んでいる河内長野だからこそ、施設のアピールをおこなうだけでなく、個人やグループがプレゼンテーションを行うブースを設けることが出来ないだろうか。様々な活動をされている人たちが、仲間を募るコーナーをつくることもできるだろう。先日、市民まつりに行ったが、野外では、なかなか容易ではないと思われるため、文化の総拠点であるラプリーホールで、ミュージックパークネットの関連プログラムとして実施することは大きな意義を感じる。また、多様なブースを繋げることで、可能となるコラボレーションを促し、ユニークなプランを提案するコンセルジュ制度をつくることも検討したい。これが実現できれば、自分達の表現活動を越境した、新たな創作の回路が拓かれることだろう。コンセルジュは、専門家ではなく、市民の方がよい。作るよりも繋ぐ方が好きだという人をコンセルジュとして養成すればよい。中川先生が中心となってまとめられた河内長野市文化振興計画の中にも、アートマネジメント講座が必要だと書かれているが、単に集まり、講義を聴講するいわゆる講座では弱い。学んだことを活かせるシ

システム、つまり、コンセルジュとして関わる場があるということが達成感を生じさせることになるだろう。職場とは違うが、“私は、まちの文化を担っているのだ”というある種の自己実現を芽生えさせるのではないか。また、自分、或は自分たちのグループの創造活動を如何に魅力的に伝えるのかという問題であるが、素人っぽいあり方にならないようにするためのプレゼンテーション講座も必要となるだろう。これらは、“誰かが私を待っている”というスローガンのもと、新たな出会いを創出し、ネットワークを形成する大きな力になるための礎を目指すものである。双方の講座は一体感を持ってやることで、リアリティを生じさせるものになることを意識しなくてはならない。データベースを制作すれば、自らのクリエイティブワークを自発的に発信していける環境をも整備することに繋がるものと思われる。私、或いは私たちのグループの活動を効果的にアピールする方法を真剣に考え、実践するマネジメント、プロデュース的感覚を鍛えることに展開させていくことが極めて大切になるのではないか。

今回は、このような内容を中心に述べたが、更に遡れば、データベースを作るにあたり、文化の概念と守備範囲、表現ジャンル等の基本計画的なレベルの検討は、既に皆さんとともに積み上げてきている。問題は、ガイダンスを実施して、一緒にやってくれる人たちを如何に募るのがポイントとなろう。我がまちの文化を未来志向で考えると、大学～小学校、場合によっては幼稚園等に個別にガイダンスに出向き、その中で興味を持った人達にお願いをするアプローチが考えられる。子どもの視点でなければ出来ないすくいあげ方もあるかと思う。また、老人ホーム等で名物おじいちゃん、おばあちゃんを探し、高齢者と子どもの異世代交流へと発展させることも出来るだろう。そこで育まれたつながりを核に、アートを媒介としたコラボレーションに結実させることも可能となろう。これらについては、本委員会の管轄が教育委員会ということでバックアップをしていただく体制に期待がもてるとともに市の福祉関連の部署との連携が重要となる。教育立市宣言をしている河内長野市としては、これが実現できれば、大変意義深い取り組みになるであろう。

更に、地域ということ軸を考えれば、自治会単位で回ることを考えられる。若い層の協力を得るためには、子育て支援センター「あいつく」や「フード&クラフト奥河内」を発刊しているグループ等ともコミュニケーションを交わし、ともに活動を進めていきたいと思う空気を戦略的に築くことが大切だ。やはり、感度のよい人達が集まるところにこちらからどんどん足を運ばなければ、何も始まらないと思う。お役所的に“ぜひ、連絡を下さい、待っています。”では、いつまでたっても情報は集まらない。まずは、慎重にガイダンスを進め、発芽させる前に種子を宿す行為を誠実におこなっていくことがデータベースを作る行動計画の第一弾になるのではないだろうか。そして、データベースは、他の自治体がやっているようなやり方ではなく、河内長野モデルを作りたい。データベースという響きは無味乾燥なイメージがあるが、宝楽委員が持参した参考資料には、立川市で、既に魅力的なデータベースが作られていることを紹介している。この資料は後で配らしていただくが、様々な先進事例を手掛かりに学び、河内長野モデルに磨きをかけ、実現すること

ができる指針を築き上げたいと思っている。

では、宝楽委員が持参された資料を配りたいと思う。彼が今までの議事録を読み返し、積み上げたものを整理してくれた。これまで、文化と言えば、どうしてもハイアートに偏ったり、評価が定まった表現者がしかるべき場所で展覧会やコンサート等を催すことが先行しがちであったが、本委員会は一貫して「日常」というキーワードを大切にしてきた。河内長野市第4次総合計画の中にも市民文化ということばが見られるが、それは、日常という切り口から文化を考える必要性を示唆しているとも考えられる。“専門家が驚かされるようなことが、実は日常で結構起きている”ということに私は強い関心を寄せていると何度も述べたが、宝楽委員はそれを「アートを日常の中にあるものとして位置付ける」とまとめてくれた。もちろん、本物に接することも大事であり、それは両輪として欠かせない。しかし、プロだけが創造表現をしているわけではなく、何度も言うように、すばらしいものを老人ホームで作っている方がいたり、子どもたちに驚かされたりすることは多いので、日常の中には、アートにつながる感覚や、アートと言い切ってしまうもので満ちていると思われる。河内長野モデルは、このような温かいものをたくさん含めたかたちで構成したいと思う。我がまちには、日常の中にもアートがたくさんあるということを強く打ち出すことが大切となろう。このプリントにキーワードとしてあげられている「暮らしの芸術都市」を如何に具現化していくか。それは、プロを招聘し、鑑賞体験を継続的に積み重ねていくことに加え、日常に潜むアート表現に接近することにこだわるのがキーになるように思う。それがアートとまちづくりを融合させて、文化創造都市を構築していくことになるのではないか。ただ鑑賞したり、アウトリーチとして、プロのアーティストに来て貰ったりするだけでなく、もっと主体的に、皆で文化と向き合う姿勢こそが望ましい。また、作品をまちなかに展示したり、演奏したりするなど、この委員会が大切に続けてきた「暮らしの芸術都市」というコンセプトを柔軟に実践するスタンスを暖めていきたい。それは、ヨーロッパを基準としたものではなく、あくまでも河内長野の地域資源を活かしたアプローチとして展開させたい。

次に、資料にある「情報基盤の構築」、これは、先程述べたデータベースのことであるが、要は資源の可視化を行い、そこに人の姿が見えること、またそこに関わった人々の反応をも把握することができるようにすることである。サイト上で、クリックすれば、それが明解にわかるようにする必要があろう。但し、サイバーな環境に不慣れな高齢者の方々にも伝える配慮として紙ベースで制作したダイジェスト版も用意したい。様々なアーティストがどこに、どれだけ存在するのかをベースに、次にサークル・NPO・企業・協力機関・行政といった、様々な立場の団体が各々で行っている活動をまとめる。それらが繋がりを持ち、シナジー効果を発揮できるシステムを生じさせたい。具体的には、資金的な支援や活動場所の提供、或いはコラボレーションに手を挙げてくれる企業が現れるかもしれない。やはり、何か核となるようなものがないとスタートを切りにくい。わかりにくいことをわかりやすくし、容易に活用できるようにすることがポイントになるのではないか。また、明

確な材料が揃えば、市の広報でもコーナーを作り、ラブリーホールが連載をしているように文化数珠繋ぎ的な読み物を掲載させることも出来るかもしれないというお話も以前井上課長からお聞きしたことがある。これを併用すれば、お金をかけなくても効果が期待できるアプローチになることだろう。また、モックルバスの掲示等も併せて活用すれば、デジタルになじまない世代への情報発信をカバーすることができる。あらゆる世代のサロンやグループを紹介し、自分も加わって参加したいと思う場を探す手掛かりになればと思う。どこで、どのように自らの表現を磨き、発表できるのかをイメージすることがまちの文化を育てる第1歩となるであろう。

宝楽委員の資料には、アウトプットとしてウェブや紙媒体、そしてその前に円卓会議があり、インキュベーション（育てる、孵化）グループがある。表現というのは分泌物であり、そうして出てきたものを、とことん育ててあげることが必要だ。また、調査という過程では、その人物を一番最初に見つけたという感覚が得られるし、プロデュースとはその人材を如何に活かし、新しい価値を投げかけるかが重要となる。まだ、評価されていない表現を発掘する作業は勇気がいる行為であり、当然のことながら目利きの感覚も必要となる。この作業をおこなう者は極めて高い本気度を要するとともに、それを愉しむセンスの持ち主であることが望ましい。彼らがまちを歩き、こちらの想いを伝え、出会いをプロデュースしていく感覚を身につけることが肝要となる。これらの作業はワーキングスタッフとしての実行委員会が担うことになるため、その組成のあり方も検討せねばならないだろう。文化振興計画推進委員会の方針に基づき、行政（ふるさと文化課）、市民・ボランティア・専門家が三位一体となれば、これまでにないスタイルで我がまちの文化を推進させる力を漲らせることだろう。

これらの提案を集約させて提言書をまとめるが、できるだけ図解を多く取り入れた企画書タイプのもので、簡潔に作成する予定だ。今日は、これまで述べてきた内容に関連することは言うまでもなく、それ以外でも提言書に加えたいことがあれば、意見を出していただきたい。どんなことでもよいので、皆さんの方でもう一度確認していただき、ご発言いただきたい。また、事務局も、委員の意見に対して、現実的に実現が困難と思われる、それも指摘いただきたい。

宝楽委員

提言書のたたき台だけでも話し合えればと、急遽断りなく資料を作成した。今まで、日常の中での文化、その中で河内長野の文化の価値をどう高めるか、ということをお話し合ってきたので、それを「暮らしの芸術都市」という言葉に集約した。これを前面にだし、今までの河内長野の文化政策から一歩踏み出せるかと思っている。こういった前提の言葉を提言した上で、今まで話し合ってきたデータベースの骨子の部分が提言できたらと思う。

谷委員長

私が専門にしている現代アートの世界でも、都市全体を巻き込んで、そこに住んでいる人達と一緒に、そこでなければ出来ないことをやる表現が注目されている。河内長野は自然が豊富であるとともに、貴重な文化財を多数有するまちであるため、その資源を武器にしていくべきと考える。「暮らし」をテーマに、アーティストだけではなく、そこに住む人々が一緒に何かを創作すれば、非常におもしろくなり、また、アーティストも大きな刺激を受ける。これは、市民参加、いわゆる公共性という点で、行政も取組みやすい事業となるだろう。

川上委員

アートとまちづくり、「暮らしの芸術都市」という言葉は採用したい。また、文化情報の可視化という言葉は、今日資料を見て気付かされたが、こちらも大切だと思う。

谷委員長

文化情報の可視化をすれば、今まで見えづらかったもの、またセクションに分かれて行っていたため、見えても興味を持ちにくかったものも、わかりやすくなるだろう。非常におもしろいと思う。やはり見出しは重要であり、とても理解がしやすくなった。

川上委員

文字やビジュアルで可視化することで、まず人を引き付けなければいけない。それと先程、谷委員長がおっしゃっていた、汚れしまっている千代田駅前や寺が池公園などに設置してあるオブジェの掃除も必要であると思う。

谷委員長

勢いがあった時に実施したものは、市民が真に求めているものか、否かを十分に吟味していないケースが多いため、愛されにくい、ましてや愛され続ける状況を生むことはかなり厳しい。例えば、公園に設置されている彫刻作品がとても好きなら、進んで掃除をするなど自主的に文化を管理する行動を起こすだろう。このような動きを継続させれば、作家も多少の謝金でまちに話をしに来てくれたりすると思う。そして、その作家にワークショップを依頼するというように繋げることも出来る。プロデュース能力があれば、もっと様々なかたちで展開は可能だ。今回の提言書では、このような具体的な提案も含めたい。理念の記述はできるだけ簡素化し、踏み込んだ提案でまちの文化が動き出すようにしたい。予算計画等についても目安を盛り込みたい。ギャラリーを運営したり、コンサートを企画し続けている南委員は様々な作家をサポートされたり、繋ぎ手として市民にアートを鑑賞する機会を積極的に創っていると思いますが、ご自分のフィールドを踏まえて、ご発言願いたい。

南委員

「暮らしの芸術都市」は賛成です。これを大きく打ち出していきたい。
今度、酒蔵通り石畳完成記念展をこの7月から来年6月まで1年かけて開催し、芸術をピックアップさせていただく。完成記念として行うが、ライトアップした石畳の美しさを見てもらい、あの石畳のまちを知っていただくためのひとつの取り組みとしている。

谷委員長

やはり、人が集いやすい、集いたいと思うような空間にこそ、インキュベーションという考え方は宿るし、人を育てる場も成立すると思う。こちらが手を加えればもっとブラッシュアップしていくし、そういう場はステージにもなるだろう。前回の議事録にもあるが、データベースと同時に地図も作りたいと考える。石畳をはじめ、特徴のある景観が載ったマップがあれば、ここでこのような表現ができるのではないかというような空想ができ、大いに活用することができる。例えば、携帯電話のCFのロケーションに設定されている東京の芝にある増上寺とその後ろにある東京タワーが赤く浮かび上がる場所、そのような場が持っている力を如何に使うかを考案することはおもしろい表現を生む。しかし、場を褒め称えるのみならず、最後には喧嘩し、独自のスタイルを確立させることが必要で、石畳にしても、予定調和的になり、第2・第3の京都と言われぬように、独創的なアプローチを募るコンペを行うなど、河内長野でしか出来ないことを行う考え方が最も大切となるだろう。また、市文化振興財団が、20周年記念事業として、助成を行っているが、ラブリールホールと河内長野のユニークな場をサテライトとして繋ぐことでより魅力的となる企画を打ち出すことを課す部門をつくり、我がまちの場の特性を際立たせるあり方を立案させることもできるだろう。

南委員

来週から蛸も鑑賞会を行うため、時間を少しずらして、石畳ライトアップを見ながら絵画も観て貰えるようにしている。また、この「暮らしの芸術都市」は、よいデザインでその必要性をアピールすることが必要だと思う。プリントにまとめられているダイアグラムは非常に良くわかるが、伝える際にハイアートの感覚で発信することが重要になるかと思う。

谷委員長

人を引きつけるデザインの力は重要だ。明解でセンスが感じられる作品はきっと、何かを生む母体になるだろう。ここは、きっちりとおさえたいと考える。さて、市民とともにおやこ劇場の活動を継続されている山田委員、ご発言願います。

山田委員

おやこ劇場はずっと、子育て団体がたくさんある中で、「文化」で子育てしている所はここだけと意識し、こだわって行ってきた。財政が厳しい時、アマチュアを呼ぶ話も出たが、やはりプロを子供に見せなければおやこ劇場ではないと話をしている。いいものを見せることと、自分たちが触発されてそちらに近づいていくことの両方を行う事は大事だと思う。また、奥河内のオーガニックマーケットや高野街道まつり等の情報を知れば行きたい、情報を教えて欲しいと聞く人が多い。発信している、自分から得ようとしないうり得られない情報となってしまっているため、そういう人が来れるような情報の発信の仕方を考えなければならないと思う。また、私は「暮らしの手帖」という雑誌を長年買っていて、この「暮らしの芸術都市」というネーミングはとても親しみやすいと思った。

宝楽委員

伊丹では、「伊丹オトラク（音楽）」という、バルにかけて普段使いの音楽を提供し、気軽に音楽を楽しむイベントを行っている。無理をせず楽しむということで、予算は10万円以下とし、自分達でイベントをおこなっている。内容は、バルをやっているお店にアーティストが行き、生演奏したり、バスに乗って車中で音楽を聴けるものだ。まち全体で音楽を身近に楽しんでいるという現場を目の当たりにした時、やはり生活の中で音楽やアート、芸術を身近に触れることが出来たら、生活は豊かになると実感があった。ただ、それだけではきっとアーティストは育たない。オトラクの中でも、演奏が終わればボランティアが募金箱を持って回るので、ある程度アーティストの収入になっていることにも注目したい。もう一歩アーティストがインキュベーションされていく時には、きちんとした音楽祭などは必要だが、でも、触れない限り価値が解らないということをととも感じる。自分でも体験したが、知ったからこそわかるおもしろさがある。そういう意味で、生活の中にあるものを可視化するということが、まずは河内長野市民が文化に対する意識を芽生えさせるきっかけになるのではないかと思う。私達はNPOでカフェもやっているが、暮らしの手帖のような本が、若い人に受けたりしている。日常、昔の人が大事にしていた、生活の知恵みたいなものが、実はおもしろく、今新たに評価されて来ているということは、若い人に実感としてあると思う。

谷委員長

魚返委員、書の世界で、自分の表現だけでなく子どもたちにも指導をされている立場から。或いは、第1期の委員会で皆さんと公民館ほかを色々と見学しましたが、社会教育施設における書の講座を続けられている立場から、ご発言願います。

魚返委員

自分の書道の原点は、書道を通じて人生を問うこと。これは芸術であっても音楽であって

も、通じるものは一緒だと思う。拠点を作って簡単なことだけでも伝えるべきであると、今、一番思う。私一人では大それたことはできないが、何人かのメンバーで教室を作るなどして、皆に文字に関心を持って欲しい。それから私が作った言葉だが、シルバーエイジの活動という意味で「ぎんかつ」。定年退職前後の時間がある方々大勢で、一緒におやこ劇場に参加し3世代に渡って行うあり方などが考えられる。世代が変わっても、せつかくの日本の文化を少しでも伝承できればと思う。とにかく、できることから手伝いたい。それから、河内長野が市になった時にできた歌を歌ったことを今でもよく覚えている。それを題材に親子3世代で合作したらおもしろいように思う。

谷委員長

聞きながら、「まちの記憶」というキーワードが浮かんできた。世代を超えてまちは記憶を保持している。一番美しい思い出を、3世代通じた巻物にしてもおもしろいかもしれない。指導された書の作品を普通に展示するのではなく、一人一人の子どもに大好きな文字を書いてもらい、それをひとつの輪にして展示すれば、それは現代アートになり、パワースポットにもなり得る。また展示して終了ではなく、展示空間をステージに見立てれば、パフォーマンスなども展開できる。真正面からではなく、少し変わった角度から攻めるあり方も必要ではないだろうか。また、河内長野の美しい音を収録することも考えられる。それについては、大阪芸大もお手伝いできる部分があるかもしれない。サウンドスケープとは音の風景ということで、まちの中には色々な音があふれていることに気づき、耳を傾けること。同じ場所でも昔は聴こえたが、今は耳にできなくなった音というものもあるだろう。河内長野のサウンドスケープを収録することをベースにするものの、河内長野の情景をイラスト化し、文字や模様等を入れた図形譜を制作し、それを見ながら演奏することもおもしろいだろう。渡辺委員は、長年、コンサートを企画され続けておられるが、河内長野の文化は豊かに育ってきているだろうか。

渡辺委員

実務的に言えば、こういう提言で私はいいと思う。どちらかというと主催する側なので、市民を無視はしていないが、いいもの作れば来てくれるという感覚がある。それだけは付加しておいた方が、市に提案する際にはよいかもしれない。個人的には「暮らしの芸術都市」はいいネーミングだと思う。私は柳宗悦「用の美」や、衣食住の中で美しいものを発見していくことに憧れを持っているが、それなら別に、骨董的・国宝的価値のない、手元にあるものでも美しいという感覚が得られる。小規模でお金をかけずによいものをつくる感覚も大切だと思う。具体的に言うと、「暮らしの芸術都市」というのが、衣食住という形の方で結び付けられればおもしろいと思う。今回の提言について、芸術活動というものは、そもそも珍しいから意味があり、条件を整備しない中でも出来ることが、基本的なクリエイティブなものと考えられる。あまり具体的にしてしまうと新しい感覚が

そこに入り込めず、プロデュースするおもしろみがなくなる。だからあまり決め付けず、ワーキングにしても、出来るだけ本人に答えが出させるような仕向け方をすべきと思う。今は教育でも、答えを先に出してしまう。答えを自分で見つけていく、そういう漠としたガイドラインの方が第1段階としてはよいのではないか。そういう気持ちでやると、成功したときに楽しく面白みがある。今度私は、80回目の記念として、コンサートを企画している。それは大ホールで大勢を呼ぶものではなく、逆にスタート時を思い出して、定員120名のみでの少人数で行うものにした。その120名の選び方も、今までの出席をチェックしたデータベースを元にして、厳選するという企画を考えた。それでも、プロデューサーはお金も管理せねばならず、頭から赤字で予算化してもいけない。要するに、会場を満員に出来れば、何とかとんとんでいけるというのが一つのレベルであり、後は、満員にできないのは自分のPRの仕方が悪いのか、その部分は改善していかないといけないことと捉える。そういうノウハウもあると思う。それともうひとつ、私が誇りに思っているのは、一切寄附はいただきず、いわゆるスポンサーはいないということだ。具体的なことについてはその都度条件によって変わってくる。マニュアルみたいなものはなく、ハプニングが結果に結びついてくる。だから、運営レベルでは、あまりノウハウを教えないような仕組みの提案をした方が、新しいものが生まれる気がする。趣旨として、「暮らしの芸術都市」というテーマの中で、可視化をしていくというところまでで止めて、可視化の内容は、ガイドラインのレベルでいいのではないかと思う。

谷委員長

非常に興味深い。マニュアルは、色々提供しすぎると、画一化し、真のプロデュース表現ができなくなる。やはり、ある程度で止めることも重要である。今後、我がまちの文化を育むためのシステムをデザインするために、あらゆる要素を整理し、実際に運用していくためのノウハウを検討することになるだろう。この情報は、知ることを前提に練り上げられたものだが、それに頼り過ぎ、縛られ過ぎてはまずいのである。伝授も大切だが、本人が自主的に思索する余白が重要だ。プロデュースもやはり、“はじめにオリジナリティありき”だし、それでこそ、その表現に全責任を負うことができる。そこに、その人らしさが滲みでなければ、おもしろくならないことを確信する。この感覚は、やった人でないとわからないと思うが、このまちでもそのようなプロデューサーが育つことを切に願いたい。

小西委員

最後と言うことで、インターネットの話が多いが、パソコンがあっても見ない人がいることも想定しなくてはならないだろう。だから、広報に掲載する際は、たくさん記事がある中で、良くわかるように工夫していただきたいと考える。

谷委員長

それは、大切なことです。編集上、目につきやすいかたちを考案する必要があるだろう。今回の提言を踏まえて、ある程度予算がつけば、文化振興計画に基づいて、少しずつでも確実に動き出すことが実感できるだろう。このプランをもっと知りたいと思わせる市広報の誌面づくりは吸引力を促す重要な鍵となるだろう。

松村委員

私は古典の方で、後進の育成に努めている。私は河内長野を文化の香るまちにしたいと思い、部屋を3つ借りている。それらは現在社交ダンスなどで使われているが、洋室が空いていることが多いので、何かの折には、会議やミーティングなどに使っていただければと思う。

谷委員長

皆がそのように、“どうぞ、お使い下さい”という考え方が、河内長野にいくつもあることをしっかりと伝えることは大切だ。それをマップ化出来れば、供給に対し、需要のバランスも取れ、まちの文化は豊かになっていくのだろう。最後に、社会教育委員も務められた経験豊かな白井委員、ご発言願います。

白井委員

文化振興というのは、最終的に、市民が文化に対してどう接するか、またどう理解して貰うかだと思う。やはり、一般市民にとって文化とは、それでは飯がくえず趣味の世界とする場合が多い。その考え方を前提に文化に接しようとしている。そして、どういう接し方なら自分が得をし、自分の人生が豊かになるか、という理解になるだろう。この分析が大事であると思う。例えば、テレビやラジオの番組を作る場合、市民が求めていることを徹底的に分析する。さらに、お金がどれほどかかるかを、プロデューサーはスポンサーと話し合う。お金が関わってくると、その分析や計算は当たることが多い。だから、あるものを皆に伝えようと思えば、分析が必要になってくる。これはすべてに共通する問題になるだろう。文化に関しても作戦が必要ではないか。極端に言えば、それが市民にどう得になるのかを説明できれば、市民にとってもわかりやすくなる。やはりわかるようにしてあげることが大事であり、そうすることによってもっと身近に感じる事が出来る。また、先程のまちの記憶ということ、これは案外人間にとって大事であるように思う。音はかさばるので捨ててしまい、過去の自然の音はほとんど残らないがそういう音も残していきたい。河内長野の市民歌も、案外知られていない。みんなが気付いてないこと、これは残してあげたら、後になって大切だと気付く。それも考えていく上でやっぱり大事ではないか。

谷委員長

誰が何を求めているのかということを知るマーケティング的な感覚は確かに必要になると思う。トレンドを意識しすぎることはよくないが、ある程度はリサーチをおこない、分析していくことが大切だろう。これはデータベースの作成と並行して手掛けることもできるだろう。市民が何を考えているのかを探る努力をし、その意見を如何に抽出するのかということも検討する必要があるだろう。また、他の行政の取り組み方を研究することで、より良い戦略が立てられるかもしれない。市民の好みが多様化しており、それに対応出来るよう、あらゆる角度から計画をたてて、実践に臨むあり方を練り上げることが肝要だ。やはり、参加する以上、多少はメリットを感じる部分がなくては、人は動かないということも確かな鉄則と言える。

今日は、全員からお話を伺うことができた。貴重なご意見を集約するかたちで提言書をまとめたい。各委員の皆様、本当に長い間、ありがとうございました。